

## “うごき”を捉えるフィールドワーク

——マリノフスキの「不可量部分」とラトゥールの「連関の社会学」を手がかりに——

鈴木鉄忠\*

### **Exploring “Nascent Moments” in Field Research: Malinowski’s “Imponderabilia” and Latour’s “Sociology of Association”**

SUZUKI Tetsutada

This paper investigates the following question: what kinds of phenomena do we try to understand in the research field through the concept of “nascent moments”? This paper focuses on the term “imponderabilia” (something that cannot be weighed), conceptualized by Bronislaw Kasper Malinowski, the Polish anthropologist who is deemed to be the founder of field research methods. It discusses Malinowski’s attempts to understand the attitudes of local peoples through deliberate observation of everyday behaviors and particular sets of actions in rituals. Further, the paper considers Bruno Latour’s “sociology of association,” in which the idea of “the social” as a specific domain is rejected and the arguments of tracing “the social” as uncertain processes and outcomes in the research field are elaborated. Further, this paper discusses the focus of Latour’s approach on “in between” actors rather than those “behind” or “above” the fields of action. Lastly, it is argued that description is a hard but essential part of fieldwork for exploring the nascent moments of actors’ mental attitude and actor-network formations.

キーワード： “うごきの比較学”， フィールドワーク， 不可量部分， アクターネットワーク理論，  
連関の社会学， マリノフスキ， ブリュノ・ラトゥール

#### 【目次】

1. はじめに—— “うごきの比較学” はどのような “うごき” を解明するのか
2. フィールドにおける諸個人の内面世界——マリノフスキの「不可量部分」
3. フィールドにおける「新たな連関」——ラトゥールの ANT
4. 結びにかえて

---

\* 共愛学園前橋国際大学国際社会学部専任講師

## 1. はじめに——“うごきの比較学”はどのような“うごき”を解明するのか

本稿のねらいは、新たな研究チーム「うごきの比較学」の方向性と課題を検討することである。前身の研究チーム「惑星社会と臨場・臨床の智」では、2016年から2019年に新原道信幹事の組織する共同研究の成果を『“臨場・臨床の智”の工房——国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』と『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』に著した<sup>1)</sup>。前チームの成果と課題を引き継ぎつつ、新たな研究チームの主題は次のように提示された。

本研究チームは、「可視的局面」の背後で諸個人の深部で不断に醸成されている「潜在的局面」に着目し、その“うごき (nascent moments)”と、社会そのものの変動 (transformation/transcendence/changing form / metamorphose) との関係性の動態を理解することを目的とする。個々人の深部における微細でリフレクシヴ (再帰的/内省的/照射的) な“うごき”に着目し、その“うごき”の方向性に応ずるかたちでの社会構想——問題のなかに予め答えが含まれているような「問題解決」ではなく既存の領域を横断して新たな問いを立てる「学」の創出を企図する<sup>2)</sup>。

本研究チームが諸個人の内面の“うごき”に着目するのは、メンバーのいずれもがフィールドワークを採用していることと深い関連がある。これまで刊行された共同研究の成果<sup>3)</sup>において研究チームのメンバーは、各自のフィールドの圧倒的な現実に直面しながら、フィールドノートを書き記し、そのなかから浮かび上がる問いと知見を析出しようとしてきた。筆者の場合、南東欧のトリエステとイストリアのフィールドにおいて、20世紀の大戦と度重なる国境変動によって、多くの地域住民が離散を体験し、それがいまなお「終わらない過去」として内面に刻印されている現実に直面した<sup>4)</sup>。また、陸上自衛隊基地配備計画が突如浮上した石垣島や宮古島の調査においても、反基地運動にかかわる地域の人々が格闘する有形無形の「しがらみ」の正体を理解することが大きな課題となった<sup>5)</sup>。そうした「個々人の深部における微細でリフレク

1) 新原道信編著、『“臨場・臨床の智”の工房——国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部、2019年。新原道信/宮野勝/鳴子博子編著、『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』中央大学出版部、2020年。

2) 新原道信幹事が作成した研究概要から引用。

3) 新原編、同上、2019年。新原ほか編、同上、2020年。新原道信編著、『“境界領域”のフィールドワーク——“惑星社会の諸問題”に応答するために』中央大学出版部、2014年。新原道信編著、『うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部、2016年。

4) 鈴木鉄忠、「国境の越え方——イタリア・スロヴェニア・クロアチア間国境地域「北アドリア海」を事例に」新原編、2014年、189-232頁。

5) 鈴木鉄忠、「国境島嶼における平和裏の戦争状態——同時代のこと」に応答する石垣島の反基地運

シブな“うごき”の重要性は、すでに神奈川県が多文化・多言語の公営団地の共同調査で指摘されていたが<sup>6)</sup>、国境地域と国境島嶼をフィールドとした調査研究でそれが再確認されることになった。こうした調査上の必要に迫られて、理論的には、境界領域<sup>7)</sup>、身体<sup>8)</sup>、日常性<sup>9)</sup>、持続性<sup>10)</sup>という観点から、“うごき”に関する検討を進めてきた経緯がある。

だが“うごき”を捉えるのは容易なことではない。それもフィールドで諸個人の機微を深く理解するには、なおのこと困難がつきまとう。深い内面まで接近できるほどの信頼関係をどのように構築するのか、どのような方法で微細な“うごき”を捉えるのか、そもそも捉えようとする“うごき”とはどのようなものなのか、“うごき”の命脈をできる限り削がないかたちでどう表現できるのか<sup>11)</sup>。無論、現象学的社会学、エスノメソドロジー、生活史法、オーラルストーリー、フィールドワーク論、解釈人類学といったアプローチが、これらの問いに独自の方法論で取り組んできた。しかしながら、①もし現象の背後にあるのは安定した「本質」「構造」ではなく、諸個人の心的態度と社会そのものの変動との関係性の動態であり、②そうした動的平衡を、事前でも事後でもなく、まさにフィールドでいかに感知し、把握し、記録するか、という課題には、いまなお検討の余地が残されているといえよう。

そうした問題群のなかでも、本稿では、〈“うごきの比較学”は、フィールドのどのような“うごき”を解明しようとするのか〉という問いに取り組みたい。そうした“うごき”は、容易に観察できるものでもなければ、予定調和的なうごきでもなく、または完全に不可視のものというわけでもない。この問いに答えるために、第2節では、フィールドワークの方法を確立した文化人類学者のプロニスワフ・マリノフスキの方法論に着目する。とくにマリノフスキが、フィールドの可視的な局面から人々の内面世界にかかわる潜在的局面を、「不可量部分」という表現で見通そうとしていたことを論じる。第3節では、ユニークな社会理論を展開しているアク

動」新原編，2018年，75-154頁。

- 6) 鈴木鉄忠，「「教師」のいない「教室」—「治安強化」のなかで苦闘し葛藤する学生ボランティア」新原編，2016年，319-373頁。
- 7) 鈴木鉄忠，「“境界領域”のヨーロッパ試論—イストリア半島を事例に」『中央大学社会科学研究所年報』第17号，2013年，133-151頁。
- 8) 鈴木鉄忠，「3.11以降の現代社会理論に向けて（3）—惑星社会におけるコンフリクト・社会運動・身体」『中央大学社会科学研究所年報』第20号，2016年，83-97頁。
- 9) 鈴木鉄忠「惑星社会における「日常生活の網の目」の探究—“うごきそのものへ”にむけた方法論の検討」『中央大学社会科学研究所年報』第21号，2017年，97-116頁。
- 10) 鈴木鉄忠，「国境地域における「平和裏の戦争状態」—“うごきの比較学”からみた「非常事態」の考察」『中央大学社会科学研究所年報』第22号，2018年，33-49頁。
- 11) 2018年12月18日に中央大学社会科学研究所の主催した第27回中央大学学術シンポジウム「地球社会の複合的諸問題への応答」では、本研究チームの報告「Session 1 地球社会のジレンマに応答する「臨場・臨床の智」に向けて」において「フィールドワークで地球社会にアプローチすることは可能なのか」「断片的なものから地球社会のジレンマを捉えられるのか」といった問いかけがあり、方法論的な課題が指摘された。

ターネットワーク理論 (Actor-Network Theory, 以下, ANT) を取り上げる。「モノのエージェンシー」「翻訳」「媒介子」といった概念を通して, ANT の提唱者の一人であるブリュノ・ラトゥールは, 人間と非人間をアクターとした新たな関係性の変化を解明しようとする。こうした ANT のアプローチが, “うごきの比較学” の目指す “うごき” の理解に重要な論点を提示していることを論じる。最後に, 本論の議論のまとめと今後の課題を確認する。

## 2. フィールドにおける諸個人の内面世界——マリノフスキの「不可量部分」

フィールドワークの創始者として知られるマリノフスキは, 記念碑的著書『西太平洋の遠洋航海者』の序論のなかで, 以下の3点をフィールドワークの方法規準としている。

- 1 部族の組織とその文化の解剖学は, 明瞭で確実な枠組みのなかで記録されなければならない。具体的な統計的資料の作成が, このような枠組みを作る方法である。
- 2 この枠組みのなかに, 実生活の不可量的部分と典型的行動が盛り込まなければならない。それらは, 詳細な観察によって集められ, 住民たちとの密接な接触によって作られる一種の民族誌学日誌という形で記録される。
- 3 民族誌学的な供述, 特色ある物語, 典型的な発言, 伝承や呪文などは, 口碑文として, つまり住民たちの考え方の記録として発表されなければならない<sup>12)</sup>。

フィールドワークでは, 第1に現場の事実に関する様々なデータを系統的かつ悉皆的に収集して整序すること, 第2に観察から得た現場の実生活と行動パターンに関する質的データをフィールドノートに逐次記録すること, そして第3に現地の人々の語りと語り口をできる限り忠実に記録し発表すること, これら3点である。ここで注目したいのが, 2番目に登場する「不可量的部分 (imponderabilia)」(以下では, 「不可量部分」と記す) である<sup>13)</sup>。原語のラテン語 *imponderabilia* は, 「重さを量る (ponderare; to weigh)」という動詞に「可能」「能力」を意味する接尾辞 (abilia) が付くが, 先頭に否定 (im-) を表す接頭辞が付くため, 「重さを量ることができないもの」という意味になる。

マリノフスキは膨大な量の資料や文献を収集していたことで知られるが, そうした人物が次のように述べている。

12) Malinowski, B., *Argonauts of the Western Pacific*, Routledge & Kegan Paul, 1920. (=マリノフスキ, 増田義郎訳『西太平洋の遠洋航海者—メラネシアのニュー・ギニア諸島における住民たちの事業と冒険の報告』講談社学術文庫, 2010年, 65頁, 傍点は原文)

13) 不可量部分の論点がこれまであまり取り上げられてこなかったことについては, 次の文献を参照。前川啓治ほか『21世紀の文化人類学』新曜社, 2018年, 330-335頁。

資料を調べたり計算したりするのでは記録できない、一連の重要な現象があり、これらはその実態を観察してはじめて理解できるのである。これらの現象を、実生活の不可量部分と呼ぼう<sup>14)</sup>。

不可量部分は、「重さを量ることができるもの」、いわば「可量部分」と対関係になっている。可量部分は、フィールドワークの方法規準の第1の点を指し示しており、具体的なデータや統計的資料である。だがそれらを駆使しても解き明かせない「一連の重要な現象」があるという。それを表現するのに、不可量部分という用語が当てられた。原語のラテン語 *imponderabilia* は、詳しいラテン語の辞書にも見当たらないため、マリノフスキの造語だと思われる。では、マリノフスキがあえて造語にしてまで表現しようとしたものとは何か。

定量的データでは到達できない「一連の重要な現象」について、マリノフスキは次のように説明する。

平日のありふれた出来事、身じたく、料理や食事の方法、村の焚火の回りでの社交生活や会話の調子、人々のあいだの強い敵意や友情、共感や嫌悪、個人的な虚栄と野心とが個人の行動にどのように現われ、彼の周囲の人々にどのような気持ちの反応を与えるかという、微妙な、しかし、とりちがえようのない現象——などのこまごまとしたことが、これに属する<sup>15)</sup>。

「これ」とは、実生活の不可量部分を指す。さらに続けて次のように述べている。

これらの事実はすべて、科学的に定式化し記録することができ、またそうすべきであるが、それには、訓練のできていない観察者が普通するような、細部をうわつつらだけみて記載するのではなく、そのなかに現われる心的態度を見通す努力をしなくてはならない<sup>16)</sup>。

実生活の不可量部分とは、日常の諸個人の行動と周囲の反応に現れる「心的態度」のことである。マリノフスキは他所でも「内面的な問題」「内面的な側面」の重要性を強調する。例えば、「そこには家族、氏族、村落共同体、部族を結ぶ無数の意図が織り出されており、「それをしなければならぬ当人にとっては、それほど痛切に感ぜられないこと」だとしても、「この側面は、社会関係の結晶した特定の法的枠組みとは異なるもので、それ自体独立に研究され、

14) マリノフスキ、2010年、56頁。

15) マリノフスキ、2010年、同上、太字は引用者。

16) マリノフスキ、2010年、56-57頁。

記述されなければならない」と論じている<sup>17)</sup>。

さらにマリノフスキは、実生活と並んで「行事」にも不可量部分があるという。「儀式、儀礼、祭りのような、部族生活の目だつ行事を研究するときも同様に、行動の詳細や雰囲気を、単なる出来事の外見と並んでしるすべき<sup>18)</sup>」だとして、「彼らの行動についてのデータを観察し、注意してみれば、すぐに、行事にほんらい含まれていた生命力がどのくらい残っているかがはっきりしてくるだろう」と論及する<sup>19)</sup>。ここでは「外見」と「生命力」という対比で、「可量部分」と「不可量部分」の議論を展開している。

ではどのようにして不可量部分を捉えるのか。マリノフスキが基礎データとするのは、行動である。なぜなら「行動とは一つの事実であり、妥当な事実であり、記録することのできる事実」と考えるからである<sup>20)</sup>。なかでもフィールドでくりかえし行われ、特色あるような行動を目にしたならば、新鮮な印象が薄れないうちに書き留める。目立った行事では、行為者と観衆の双方の行動を注意深く記録する。これらの一連の行動データから、「人々が、まじめであるか、ふざけているか、真剣に気持を集中させているか、退屈そうに気まぐれに行動しているか、いつもと同じ気分であるか、興奮してぴりぴりしているか」の解釈を試みる。観察され記録された行動が、当該社会でありふれたものか、それとも例外的なものなのかを「(住民たちの) 行為を部族生活の適当な場所に『おく』こと」で理解する。こうした距離をおいた観察に加えて、「ときにはカメラ、ノート、鉛筆をおいて、目前に行われているものに加わるのがよい」として、距離を縮める参与についても述べている<sup>21)</sup>。

ここから不可量部分という造語でマリノフスキは、フィールドで観察可能な行動から人々の内面世界へ、「可視的なもの」から「潜在的なもの」の解明を目指していたことがわかる。実証的データの詳細な記録は手段であり、その目的は諸個人を突き動かす心的態度の把握である。マリノフスキは、実生活の不可量部分と行事の不可量部分の解明を、フィールドワークの方法規準として明確に据えた最初の人物だったといえよう<sup>22)</sup>。

これまでの議論を本稿の問いに関連させると次のようにいえる。〈“うごきの比較学”は、フィールドのどのような“うごき”を解明しようとするのか〉という問いに対して、マリノフスキならば、〈フィールドの事実のなかに現れる心的態度〉と回答するだろう。そうした側面は、

17) マリノフスキ, 2010年, 57-58頁。

18) マリノフスキ, 2010年, 58頁。

19) マリノフスキ, 2010年, 58-59頁。

20) マリノフスキ, 2010年, 59頁。

21) マリノフスキ, 2010年, 59-60頁。

22) フィールドの人々と同じように、フィールドワーカーもまた「不可量部分」をもつことを、マリノフスキの日記は衝撃的な形で明らかにした。調査者と被調査者の「不可量部分」は、二つの独立した実体では決してありえず、相互に影響し合っている。マリノフスキ, 谷口佳子訳『マリノフスキ日記』平凡社, 1967年(原著), 1987年(邦訳)。

資料や文書といったデータに記録されないが極めて重要であり、実生活や行事における人々の行動と周囲の反応のなかで顕在化してくる。

またマリノフスキが西太平洋諸島の「不思議な慣わし」であったクラ交易をフィールドの事実として、そのなかに現れる心的態度を生き生きと描き出しているところに、「不可量部分」がそれ自体で安定した「本質」「構造」というより、うごきあるものとして捉えていたことが推察できる<sup>23)</sup>。諸個人の心の態度は、クラ交易という社会慣行との関係性のなかで「生命力」を吹き込まれ、クラ交易もまた、それに関与するすべての人々の尽力によって生きた慣行となる。マリノフスキの「不可量部分」からは、フィールドの人々の“うごき”を見通しながら、社会全体のうねりを見晴らそうとする、総観的な見方が現れているといえるだろう。

### 3. フィールドにおける「新たな連関」——ラトゥールの ANT

マリノフスキは、人々の「心的態度」は行動に現れるのであるから、フィールドの人々の行動の観察と記録を通して「不可量部分」に迫る道筋をつけた。ただし彼のフィールドと関心は、不確実な新たなうごきというより、日常や行事のように反復されるうごきであり、社会の再生産に貢献するような動態に向けられていたといえる。では、より不確定で、予測困難な事態に向かうことや、社会運動のような既存の秩序の解体と新たな秩序の形成に向けられた“うごき”をどう捉えたらよいだろうか。

社会的世界の不確定なプロセスを独自の視点で解き明かそうとしているのが ANT である。ANT は、科学や技術の社会学的研究を出発点としながら、「複雑なものを複雑なまま理解する<sup>24)</sup>」ための有力な理論と方法を彫琢してきた。従来の社会理論が捉え損ねてきた、フィールドの動的プロセス、人間以外のモノの作用、社会と自然の二項対立を取り払った異種混淆の連関に光を当てていく。ANT には様々な立場や論者が存在するが、ここではブリュノ・ラトゥールの ANT に限定し、とくに『社会的なものを組み直す—アクターネットワーク理論入門』を取り上げる<sup>25)</sup>。

23) 「…そこに住民たちの心の態度がはっきりと現れている。つまり、彼らは、ヴァイグアを、それ自体このうえなくよいものと考えている。換金できる富とか、金目を含んだ装飾品とか、権力の道具などとは考えていない。この所有自体がうれしいこと、心の休まること、ほっとすることなのである。彼らは、これを何時間も眺めたりいじったりする。さわっただけでも、それに含まれたよい力がある。いろいろな状況下で伝わってくるのである」マリノフスキ、2010年、409頁。

24) ANT に関する生成的対話研究会での竹端寛の表現である。

25) Latour, Bruno, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory*, Oxford University Press, 2005. (=ラトゥール、伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す—アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局、2019年)

## 2つの社会学

「社会的 (ソーシャル social)」というとき、私たちは何を意味しているか。ラトゥールは、この用語にはこれまで2つの意味——「社会的なるもの」と「連関」——の混同があったという。「ソーシャル」の語源は、語根「sequi-」の「後に続くこと」にまで遡る。そこから「加わる」「集まる」といった意味になり、これがラテン語「socius」の「結び合わすこと」「共同すること」「共通点を持つこと」「仲間」「友人」「親友」の意味に派生する。ところが近代になるにつれ、「ソーシャル」の意味は狭まり、「営利活動を共同で行うこと」「企業」「組織」「社会契約」「社会問題」といった意味に限定されていく。ついには近代社会と近代科学の成立により分業体制を敷くことになった各専門分野——政治学や経済学や生物学や心理学やテクノロジーなど——の残余の意味内容を「社会的なもの」の用語が引き受けることになった。こうして「後に続くこと」という語根から派生し、うごきやつながりを広く意味する「連関 (association)」という内実は、「ソーシャル」の語から抜け落ちることになった<sup>26)</sup>。ラトゥールが復権を試みるのは、まさに「ソーシャル」の最古の意味である「様々な人や事物がひとつに組み合わせるうごき」、すなわち「連関」だった。

「ソーシャル」を一種独特の「社会的なもの」として実体化し、それを説明変数として持ち出すのか。それともあくまで「組み合わせるうごき」の意味にこだわり、事象の背後に一切の「社会的な力」を持ち出さないのか。どちらに立つかによって、決定的に異なるアプローチに分かれる<sup>27)</sup>。前者は「社会的なものの社会学」と名付けられ、他の実在する領域とは別個に存在する「社会的なるもの」の領域を措定し、それを社会現象の説明変数に採用する。「社会的文脈」「社会的説明」「社会構造」というときの「社会的」という形容詞が、それにあたる。だがラトゥールは、物理界に実在すると長らく信じられていた「エーテル」のように、「社会的なるもの」という存在証明不可能な説明原理を持ち出すことを断固拒否する。その代わりに、あらゆるものつながりから社会的世界の説明を試みる社会学のアプローチとして、「連関の社会学」を提示した。

社会学を、「社会的なものの科学」と定義するのではなく、*つながりをたどること (tracing of association)* と定義し直すこと (…) この第二の意味において、社会的という形容詞は、白羊のなかにいる黒羊のように他とは異なる事物を指し示すのではなく、それ自体は社会的ではない事物同士の *ある種の結びつき (a type of connection)* を指し示すものである<sup>28)</sup>。

だが「ソーシャル」の第2の意味を社会学の根幹に据える場合、懸念が生じる。もしありと

26) ラトゥール, 2019年, 8頁および16-17頁.

27) ラトゥール, 2019年, 20頁.

28) ラトゥール, 2019年, 15頁.

あらゆる結びつきを「ソーシャル」とするならば、この語自体が無規定な用語になるのではないか。そこでラトウールは「ソーシャル」の意味に限定をかける。

社会的という語によって通常呼ばれているものよりはるかに幅広くなければならないが、新たなつながりをたどることと、その組み合わせをデザインすることに厳しく限定されなければならない。したがって、社会的なものを、特別な領域、種差的な領野などと定義するのではなく、つなぎ直し、組み直していく固有の動きとして定義するにとどめようとしているわけである<sup>29)</sup>。

ここで重要なのが、「新たなつながりをたどること」「その組み合わせをデザインすること」「つなぎ直し、組み直していく固有の動き」への着目である。ありとあらゆるつながりではなく、新たなつながりにむけて社会的なるものが組み直されていく特定の瞬間とダイナミクスが「ソーシャル」の意味であり、その独自のうごきに分析の主眼がおかれる。こうしてラトウールは、「ソーシャル」の意味を分節化しながら2つの社会学の根本的な相違を次のように比較対照する（図-1）。

図-1 2つの社会学の相違

	「社会的なもの」の社会学 sociology of “the social”	連関の社会学 sociology of association
①	社会的でない活動の背景には社会的な「コンテキスト」がある	社会的な秩序に種差的なものは何もない
②	社会的コンテキストは、ひとつの種差的な実在領域である	「社会的」とラベリングできないかなる実在領域も存在しない
③	社会的コンテキストは、固有の因果を有するものとして扱うことができ、それによって他の領域（心理学など）では十分に扱いきれない面が説明できる	他の学問領域で説明のつかなかった特徴を「説明」するために「社会的な力」を持ち出すことはできない
④	社会的コンテキストは、社会学者や連辞符社会学者が研究する	構成員たちは、自分が何をしているかについて、よくわかっている
⑤	通常の人々は社会的世界に埋没しているために、せいぜい情報提供者になるか、あるいは無知のままとされる	アクターはどんな場合でも「単なるインフォーマント」をはるかに超えた存在である
⑥	自然科学に準じた定量的手法によって、科学的知識を産出できる	「社会的要因」を付け加える意味はない
⑦	非定量的な手法としては、「解釈的」側面などを導入して説明の間に合わせる	「社会の科学」から得られる政治的な意義は、必ずしも望ましいものではない
⑧	社会に関する専門知識をもつ者として社会に認知され、ときには政治的な意義を有することがありうる	あらゆる人やモノは、社会的なコンテキストではなく、狭い導管を循環している数々の連結装置のひとつとして解釈されるべきである

出所：ラトウール（2019: 12-14）から筆者作成。

29) ラトウール，2019年，18頁。

では連関の社会学は、どのようにして社会的世界を解き明かそうとするのか。まず大前提としてラトゥールは、「この世界が何でできているか」という問いに完全な回答を提示することはできないと考える。なぜか。連関の社会学の立場から、次の理由による<sup>30)</sup>。

- 第1に、世界は安定したグループではなく、流動的なグループ形成だけがあるからだ。
- 第2に、この世界でなされる行為は、アクターを超えてなされるからだ。
- 第3に、人間だけではなく、モノにもエージェンシーがあるからだ。
- 第4に、唯一の〈厳然たる事実〉ではなく、複数形の〈議論を呼ぶ事実〉があるからだ。
- 第5に、社会的世界の「なかで」は常に未完成の報告を行わねばならないからだ。

ラトゥールはこれら5つを「不確定性の発生源」と呼ぶ。これらが社会的世界に関する確実な認識を困難にしている根源的な理由とする。上記の各論点を議論することによって、ラトゥールはANTの基本的な考え方を展開していく。「既設の高速道路を運転する」ようにではなく、「起伏のある土地を初めて探索する」ように社会的世界のダイナミクスを理解しようとする<sup>31)</sup>。そこで本稿の問題関心に関連させて、5つの論点を見ていく。

### 第1の不確定性の発生源——グループではなく、グループ形成だけがある

私たちの生きる社会的世界は、安定したグループの集まりではなく、流動的なグループ形成だけでできている。では、何がグループ形成の発生源なのか。ここで重要なのが、中間項と媒介子の峻別である。

社会的なものを生み出す手段を中間項 (*intermediary*) として捉えるのか、媒介子 (*mediator*) として捉えるのかによって、非常に大きな違いが生まれる<sup>32)</sup>。… 中間項は、私の用語法では、意味や力をそのまま移送する〔別のところに運ぶ〕ものである。つまり、インプットが決まりさえすれば、そのアウトプットが決まる。… 他方で、媒介子は、きっかりひとつのもののみなすことはできない。… インプットからアウトプットをうまく予測することは決してできない。その都度、媒介子の特性が考慮されなければならない。媒介子は、自らが運ぶとされる意味や要素を変換し、翻訳し、ねじり、手直しする<sup>33)</sup>。

30) これらの5つの命題は、『社会的なものを組み直す』の「第I部 社会的世界をめぐる論争を展開させるには」の第1から第5の不確定性の発生源に対応している(ラトゥール, 2019年, 43-226頁)。

31) ラトゥール, 2019年, 46頁。

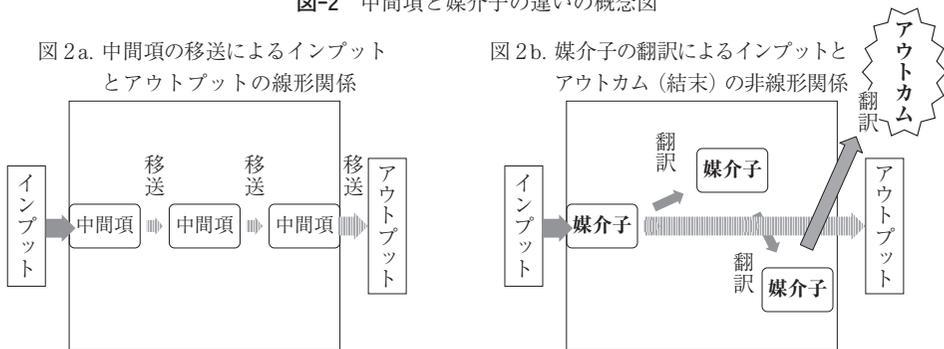
32) ラトゥール, 2019年, 73-74頁。

33) ラトゥール, 2019年, 同上。

あるシステムにおいてインプットとアウトプットが線形関係で成り立つ場合、関係する諸要素は「中間項」として「移送」に勤しむ。中間項は意味や力をそのまま移送するため、入力から予測可能な出力が供給されることになる。だが、そこに非線形の関係が発生するとき、ある要素は「媒介子」としてふるまっていることになる。インプットをそのまま移送するのではなく、それを翻訳、意識、改訳といった意味変容を起こすため、予測通りの出力（output）ではなく予測困難な結末・帰結・顛末・意図せざる結果（outcome）を引き起こすことになる（図-2）。

ここである人やモノがア priori に中間項か媒介子かどうかを断言できない。例えば、正常に作動するプリンターは、印刷のコマンドを入力した文書データをそのまま打ち出し原稿として排出する限りでは、中間項である。しかし強い物理的衝撃や何らかの不具合を被ると、プリンターはそのときからユーザーの手に負えない媒介子に変わる。なぜならインプットをしても期待通りのアウトプットを供出しなくなるからである。あるいは日常会話や対話は、実際に交わされる言葉や表情のやりとりによって、話題の行方が刻一刻と変化していく。そのため話者は媒介子として事態の進行に与する。しかし、予定された結論に向かって議論が行われる定例会議ならば、参加者は中間項として席に座っていることになる。あらゆる人やモノは、特定の瞬間に中間項にも媒介子にもなりうるのであり、いつも「Yes」と言っていた人が、あるとき「No」と断るときもある（その逆もある）し、スイッチを押せば常に起動していたモノが途端に動かなくなるときもある<sup>34)</sup>。そのため重要なのは、いかなる条件の下で、どのような場面と瞬間において、「その事物は、中間項として振る舞っているのか、媒介子として振る舞っているのか<sup>35)</sup>」を明らかにすることである。

図-2 中間項と媒介子の違いの概念図



出所：ラトゥールの議論から筆者作成。

34) ただし、会話や対話といった対等関係よりも、序列関係や命令-服従関係の方が、中間項のふるまいが多く観察されると思われる。ピラミッド型の組織や上下関係は、「支配」から「付度」まで、システムや組織のパフォーマンスを計算通りに移送させるような権力と技術を内蔵しているからである。

35) ラトゥール、2019年、75頁。

## 第 2 の不確定性の発生源——行為はアクターを超えてなされる

ではどのようにしてある事物が中間項または媒介子だといえるのか。それはひとえに調査者の「報告」によってであるとラトゥールはいう。例えばフィールドワークのとき、ある場面である人や事物が何かをしているとする。すると観察できた何かが変化や差異を導入する力（エージェンシー）として、調査者の目を引く。調査者はそれをフィールドノートに書き留める。ノートのなかでそれが相貌を有するアクターとして形象化される。さらに敵対するもの、競争するもの、協調するものがフィールドで観察できる場合、形象化されたアクターはそれらとの対比でより際立って記述されることになる。ここで「そのエージェンシーが——存在、形象化、敵対するエージェンシーが与えられると——中間項として扱われるのか、媒介子として扱われるのかによって、大きな違いが生まれる」ことになる。「分析者がどちらに決めるかによって、アクターによる報告の結果は大いに違ったものになる<sup>36)</sup>」からだ。

この作業は言うは易く行うは難しだろう。その点をラトゥールも承知している。だが、エージェンシーに関する問い——誰かが何かを行為するとき、誰または何がそこに行為／作用しているのか——を「社会学的エーテル」（社会構造、システム、社会的文脈、社会的背景、文化、国民性、集合的無意識など）を持ち出して「合成してしまわないこと」、「行為を、驚くべきこと、媒介、出来事のままにしておくべき」で、「非常にゆっくりと進むべき」ことが ANT の掟である<sup>37)</sup>。行為の説明をアクターの意図やシステムの力に還元せず、常にオープン・クエスチョンとすることで、「各点が十二分に作用しているといえる媒介子の連関（concatenations of mediators）からなる世界を描く」ことを ANT は目指すのである<sup>38)</sup>。

## 第 3 の不確定性の発生源——モノにもエージェンシーがある

では変化を生み出すエージェンシーは、人間だけなのだろうか。ANT の最もラディカルな見解の一つが「モノにもエージェンシーがある」という主張である。ANT が拒否するのは人間とモノの峻別、象徴界と物質界、社会と自然の二元論である。ラトゥールのアクターの定義はいたってシンプルで、「差異を作り出すことで事態を変える物事はすべてアクター」の資格をもつ<sup>39)</sup>。例えば「私はナイフで肉を切る」と「ナイフは肉を切る」、「彼は新型ウイルスに感染した」と「新型ウイルスは彼に感染した」、「国境警備隊は移民の流入を国境バリアで防いだ」と「国境バリアは移民の流入を妨げた」は、いずれも主語が「人」か「モノ」かで異なるが意味は同じである。「ナイフ」「新型ウイルス」「国境バリア」は、他の人やモノに変化や差異をもたら

36) ラトゥール、2019 年、109-110 頁。

37) ラトゥール、2019 年、87 頁。

38) ラトゥール、2019 年、113 頁。

39) ラトゥール、2019 年、134 頁。

し、事態を変容させる限りにおいて、人間以外の存在（非人間<sup>40)</sup>）も人間と同様にアクターとみなされる<sup>41)</sup>。

ただし、モノをエージェンシーに含める場合、非人間を報告に載せる準備が、調査者には必要になる。モノが媒介子になるとき、いわば人間が話すように「モノが語りだす」場面を捉える難題が待ち構えている。そこでラトゥールは5つのヒントを例示している。

第1は「イノベーション」である。科学者の実験室、新商品開発を進める会社の部署など、「イノベーションや論争の場では、モノが、すぐに不可視の非社会的な中間項になってしまうことなく、報告の対象となる分散的、可視的な媒介子として、他の場よりも長く維持されうるといふ点で、どこよりも恵まれた場<sup>42)</sup>」である。当事者が旧来のものにも変わる何かを創り出そうとする社会運動のようなフィールド調査では、とくにこうした場に遭遇することがしばしば期待できるだろう。

第2は「ストレンジャー」である。新しい環境や未知の土地で「新奇なものを出くわすなかで、モノは媒介子になり、少なくとも、ノウハウや習慣化、旧式化によって再び消え去るまでのしばらくのあいだ、媒介子になる<sup>43)</sup>」。フィールドワークの初期の時点はまさにこうした状態が続く。調査者にとっても被調査者にとっても、カルチャーショックはその好例である。

第3は「ハプニング」であり、「事故や故障やストライキによって生まれ」「まったく表に出てこなかった中間項が、突如として、一人前の媒介子になる<sup>44)</sup>」。フィールドワークでは、予測困難な出来事が発生することが少なくないが、そうしたトラブルやリスク（交通機関の遅れ、機材トラブル、インターネット環境の不具合、感染症など）は調査の前提条件だったはずの様々なモノが、媒介子に変貌する。

第4は「アーカイブ」であり、「モノがすっかり後景に退いてしまったときには、アーカイブ、文書記録、回顧録、博物館の収蔵品などを用いて、モノに光を当て直すことができ、そして、歴史家の説明を通して、機械や装置が生まれた重大局面をいつでも人工的に作り出すことができる<sup>45)</sup>」。考古学、歴史学、社会史、アナル学派の一連の仕事、カルロ・ギンズブルグの

40) ラトゥール、2019年、134-136頁。なおモノには、感知可能な物体のみならず、におい、記憶なども含まれる。そのためより正確には人間以外のあらゆるものを意味するため、非人間 non-humans とラトゥールは呼ぶ。「非人間という表現が指し示しているのは、実在の一領域でもなければ、極小のレベルで動く赤防止のゴプリンでもなく、分析者が何らかの相互作用の持続と広がりについて説明するために目を向ける準備をすべきものであるにとどまる」（ラトゥール、2019年、136頁）

41) 海外体験学習におけるモノのエージェンシーについては、次の拙稿で部分的に論じた。鈴木鉄忠、「『本物を見た！』—「真正性」と「観光のまなざし」の間の海外体験学習」『共愛学園前橋国際大学論集』20号、2020年。

42) ラトゥール、2019年、151-152頁。

43) ラトゥール、2019年、152頁。

44) ラトゥール、2019年、153頁。

45) ラトゥール、2019年、154頁。

作品、歴史社会学の関心は、モノのエージェンシーに光を当てる一例と考えることができる。

最後に「想像」であり、サイエンスフィクション、空想、思考実験を通して「今日の堅固なモノを、流動的な状態にすることができ、人間との結びつきが少なくとも想像可能になる<sup>46)</sup>」。グレゴリー・バイトソンの独創的な思考実験はその好例であろう。

#### 第4の不確定性の発生源——〈厳然たる事実〉対〈議論を呼ぶ事実〉

では、人間と非人間が結びついている在り様をどう呼べばよいのか。ラトゥールは「事実の構築」という表現を採用する。「事実」は、人間と非人間の組み合わせで成り立っており、それが実在としてあることを意味する。つまり「構築」とは、実在しないもの、仮象のものという意味ではなく、「実在するもの同義語」である<sup>47)</sup>。だが通常理解されるような「社会構築主義」の立場では、「構築」は別様に理解されている。そのことがラトゥールらの「構築」との意味の混同をもたらしてきた。そのため注意が必要である。

私たちを除く社会科学の研究者と自然科学の研究者にとって、構築という語は、それまで常識で考えられていたこととはまったく異なることを意味していることがわかったのだ。つまり、何かが「構築された」ということは、それが真実ではないことを意味していたのである。…つまり、実在しており構築されていないか、さもなければ、構築された人工的なものであり、仕組まれ発明されたものであり、作り上げられた偽物であるか、のどちらかを選択しなければならないという考え方だ<sup>48)</sup>。

社会構築主義のいう「構築されたもの」は、真実ではないもの、偽物、実在しないものである。この点でラトゥールらの意味する「構築」と正反対である。それでもなお、「この語を用いることで、人間と非人間がひとつに融合する場面にはっきりと焦点が当たる<sup>49)</sup>」として、ラトゥールは「構築」という用語を採用し続ける。そこで「構築主義」と「社会構築主義」の2つの用法に分け、それらの違いを次のように区別する。

「構築主義」を「<sup>ソーシャル</sup>社会構築主義」と混同してはならない。私たちが「ある事実が構築される」と言うときには、さまざまな事物を動員することで、堅固で客観的な<sup>リアリティ</sup>実在性が報告されることを示しているにすぎない。そして、そうした事物の組み合わせはいつもうまくい

46) ラトゥール, 2019年, 151-154頁。

47) ラトゥール, 2019年, 167頁。

48) ラトゥール, 2019年, 169頁。

49) ラトゥール, 2019年, 171頁。

くわけではない。他方で、「社会構築主義」は、この実在性を構成しているものを何らかの他の素材、つまり、社会的なものに置き換えることを意味している。…どんな構築が行われるにしても、非人間の存在が大きな役割を果たす必要があり、このことこそ、私たちが当初から、社会的構築という他愛のない語で言いたかったことなのである<sup>50)</sup>。

ラトゥールが社会構築主義を批判する理由は、事実の実在性を、人間と非人間の作用連関ではなく、社会的なものに「置き換え」てしまうことにある。ラトゥールは「説明することとは、謎めいた認識作用の芸当でなく、事物と事物を結びつけること、つまり、ネットワークをたどることからなる極めて日常実践的な世界構築の取り組み<sup>51)</sup>」と考える。よってANTの課題は、「社会的なもの」による「置き換え／代用」ではなく「翻訳」であり、「ある原因を〔象徴的なものなどに〕移送する関係ではなく、二つの媒介子の共存を引き起こす関係<sup>52)</sup>」を説明することである。前述したように連関の社会学は、インプットの前提となるアウトプットを凌駕する結末（outcome）をもたらす媒介子の連関を対象にする。それゆえ確定的な事実として説明を提示できなくなる。そのため単一の〈厳然たる事実〉からなる世界から、複数形に余地を常に残す〈議論を呼ぶ事実〉の世界として、いわば「正解」ではなく「問いを含んだ回答」を提示していくことになる<sup>53)</sup>。

### 第5の不確定性の発生源——失敗と隣り合わせの報告を書き留める

上述した諸点に留意しながら、社会的世界の変化を「社会的なもの」に「置き換え」ることなく、人間と事物の新たな結びつきとして説明することはいかにして可能なのか。「正直なところ、簡単ではない<sup>54)</sup>」とラトゥールが率直に述べているように、難題である。そこでANTが目指すのは、できる限り「上手くできた報告」に近づくことでしかない。上手い報告は、「すべてのアクターが何かをしており、ただ座しているわけではない物語、記述、命題」であり、「書き手がどれだけの数のアクターを媒介子として扱っているのか、そして、書き手が社会的なものを読者にどこまで見せることができているのか」である<sup>55)</sup>。逆に下手な報告とは、「ひと握りのアクターだけが他のすべてのアクターの原因にされており、他のアクターは、因果の流れの光景にあるか因果の流れを中継する役割を果たすだけで、それ以外の役割を果たすことはない」

50) ラトゥール、2019年、171-172頁。

51) ラトゥール、2019年、193頁。

52) ラトゥール、2019年、204頁。

53) ラトゥール、2019年、220頁。

54) ラトゥール、2019年、230頁。

55) ラトゥール、2019年、243頁。

ものである<sup>56)</sup>。よって目指すべき報告とは、わずかな媒介子が多数の中間項を引き連れるものではなく、多数の媒介子が新たな連関を形成する様を描いたもの、ということになる<sup>57)</sup>。

そうすると「アクター—ネットワーク」の意味もはっきりしてくる。ANTにおけるネットワークとは、通常イメージされる交通網やインターネット網のように、すでに外在化された点と線の相互結合ではない。アクター—ネットワークは概念であり、報告するためのメタファーである<sup>58)</sup>。そして上手い報告で明らかにされるアクター—ネットワークは、中間項の安定した点と線の集合としてではなく、ノードのアクターが媒介子としてふるまうことで連鎖的に形成される関係性の総体を概念化したものとして報告されることになる。

概念として報告されるネットワークは、3つの重要な特徴を備える。

- (a) 点と点が結びついており、その結びつきは物理的にたどることができ、したがって経験的に記録できる。
- (b) 網を海に放り込む漁師であれば知っているように、そうした結びつきは、結びついていないところの大半を空いたままにしている。
- (c) この結びつきはタダでできているのではなく、鋼板で網を修復する漁師であれば知っているように、手間がかかる<sup>59)</sup>。

ここで (a) と (c) は、ゲオルグ・ジンメルが「社会成形」という概念で捉えようとしたうごきに似ており<sup>60)</sup>、また (b) のネットワークのすき間は、ロナルド・S・バートの「構造的空隙」の概念と重なる点である。ただしラトゥールは、これら3つすべての特徴を人間に限定せず、非人間を含めた結びつきと空隙のうごきで表現しようとするところに独自性がある。

56) ラトゥール、2019年、247頁。

57) 上手くいった報告と下手な報告は、「厚い記述」と「薄い記述」と対比して検討できよう。

58) 「したがって、ネットワークという語は、電話網、高速道路網、下水網などにみられる「ネットワーク」のように、相互連結した点の集まりから成り立っているような外在するものを指してはいない。ネットワークは、あるテーマについて調査後に書かれたテキストの質を示す指標でしかない」(ラトゥール、2019年、248頁)。

59) ラトゥール、2019年、250頁。

60) 「人間関係は、絶えず結ばれては解け、解けては結ばれるもので、立派な組織体の地位に上ることがなくても、永遠の流動および脈拍として多くの個人を結び合わせるものである。人間が見つめ合う、妬み合う、手紙のやり取りをする、午餐を共にする、これという利害がないのに同情や反感をもって触れ合う、親切への感謝から二度と解けぬ絆が結ばれる、誰かが誰かに道を尋ねる、互いに相手のことを考えず飾ったり化粧したりする… 社会というもの、もともと、機能的なもの、諸個人の能動的及び受動的な活動であって、この根本性格から見れば、社会 (Gesellschaft) というより、社会化 [社会成形—引用者挿入] (Vergesellschaftung) というべきものである」(ゲオルグ・ジンメル、清水幾太郎訳『社会学の根本問題—個人と社会』岩波文庫、1979年、22頁)。

アクター—ネットワークで注目したいのが、(b)の積極的な意義である。ネットワークの未結合の空間、すき間には何があるのか。ラトゥールは回路の網の目の合間に広がる空いたままのスペースを「プラズマ」と呼ぶ。

まだ定型化されておらず、まだ計測されておらず、まだ社会化されておらず、まだ計測基準の連鎖に組み込まれておらず、まだカバー、調査、動員されておらず、あるいは、主体化されていないものだ。… それは合間 (*in between*) にあるのであって、社会的な素材で作られたものではない。外部は隠されているのではなく、単に知られていない (*unknown*) だけだ<sup>61)</sup>。

アクター—ネットワークの未接続空間は、「広大な後背地」のようなもので、「天文学的に大きくて多様」（ガーフィンケル）である<sup>62)</sup>。たとえどれほど上手くいった報告でも、説明し尽くせない「プラズマ」が残る。だがプラズマは、社会の外部でも深部でも背後でもなく、「合間」にある。それは不可知ではなく、未知の領域としてあり続けている。

こうしてANT流のフィールドワークには、2つの相反するモットーが据えられることになる。すなわち、「ひたすら記述すること<sup>63)</sup>」と同時に「空白を埋めてはならない<sup>64)</sup>」のである。フィールドで観察する人間の行動、それを可能にする人間とモノの複雑な作用、変化を生み出すアクターの連関を、ひたすら記述しながらも、広大な未知の領域がアクター—ネットワークの「合間」に広がっている。フィールドワークを経験したもなら誰しも、フィールドでの変数の多さに圧倒され、どこから記述の手を付けたらよいのか途方に暮れることがあるだろう。だがそれらに「構造」「相互作用」といった一種独特の「社会的なもの」を説明変数として持ち出して「置き換え」せず、あくまでフィールドの複雑性に従う理論と方法が、ANTのアプローチである。

ANTの提案は、しごくもつともであるが、実際は難題極まりない。だが“うごきの比較学”が目指すものから照らしてみると、「すでに安定したかたちで組み合わせさせた社会的なもの」ではなく「社会的なものが組み直される」局面に問題関心があることは明らかである。なかでも「社会的なものの組み直し」が「外部」「背後」「深部」ではなく「合間」で起きているという見解は、非常に重要である。“うごきの比較学”は、“うごき”が可視的局面的「背後」の潜在的局面で起きており、諸個人の「深部」に関連すると考えてきた。しかしながら、ANTの間

61) ラトゥール、2019年、462-463頁。

62) ラトゥール、2019年、462頁。

63) ラトゥール、2019年、258頁。

64) ラトゥール、2019年、466頁。

題提起を真剣に受け止めるならば、「うごき」は社会的世界の「外部」でも「背後」でも「深層部」でもなく、すでに私たちの「合間」にある。それは調査者が見過ごしており、記録し損ねたがために、「未知の領域」なのだ。だからこそ、フィールドノートに書き留めること、そしてリフレクションを重ねることは、最重要の作業に位置付けられる<sup>65)</sup>。

本節の見てきた「連関の社会学」の要点をラトゥールは次のように要約している。

- ① 社会的なものが問われるのは、私たちを一つに結び付けている紐帯がほどけ始めるときである
- ② 社会的なものは、ある連関から別の連関への思いもよらない動きを通して見出される
- ③ この動きは、中断させることも再開させることもできる
- ④ この動きを早まって中断させてしまう場合に、社会的なものが、一般に考えられているように、すでに受け入れられている参与子——「社会的アクター」とよばれる「社会」の構成員——が持ち合わせているものに見えてしまう
- ⑤ 収集に向かう動きが再び始めれば、後に参与子になる可能性のある数々の非社会的な存在を通して、連関としての社会的なものがたどられる
- ⑥ この追跡をせつせと続けていけば、共通世界の共有定義——私が集合体と呼んできたもの——に至るだろう
- ⑦ 集合体を共通のものにする手続きがない場合、集合体の組み立ては失敗するだろう
- ⑧ 最後に、社会学を最も的確に定義するならば、社会学とは、参与子が集合体の組み直しに明確に取り組めるようにする学問分野である<sup>66)</sup>。

上記の議論を踏まえて本稿の問い〈“うごきの比較学”は、フィールドのどのような“うごき”を解明しようとするのか〉に答えるとしたら、ラトゥールのANTは、〈人間であれモノであれ、変化を生み出すアクターを追跡して記述し、社会的なものが新たに組み直される様相を解明する〉と回答できるだろう。もちろん、だれもがマリノフスキの作品やドストエフスキーの小説のように、報告されるアクターを媒介子として描く力量と巧みさをもつことは難しい。だがひたすら記述することは不可能ではないし、本研究チームの採用する調査研究スタイルでもある。フィールドで観察されるものの「合間」には常に広大な未知の領域が開けていること

65) 「紙に何かを記録するという単純な行為は、それだけで途方もない変換を起こしており、その行為には、風景を描いたり、複雑な生化学反応を起こしたりするのと同じくらいの力量が求められ、まったく同じ巧みさが求められる。研究者たる者は、ひたすら記述することを屈辱に感じるべきではない。それどころか、ひたすら記述することは、類い稀なるこの上ない偉業である」(ラトゥール, 2019年, 258頁)

66) ラトゥール, 2019年, 467頁。

を意識しつつ、社会的なものが組み直されていく局面を捉えるべく、未完の記述と報告を書き留めることが、連関の社会学の課題であり、“うごきの比較学”の課題でもあるといえよう。

#### 4. 結びにかえて

本稿では、新たな研究チーム“うごきの比較学”の課題の1つとして〈どのようなフィールドの“うごき”を解明しようとするのか〉という問いを立て、その回答をマリノフスキの「不可量部分」とラトゥールの「連関の社会学」から検討した。

マリノフスキは、文書や資料などの可量部分では解明できない重要な現象があり、それを「不可量部分」と命名した。それは諸個人の心的態度を意味し、フィールドで観察可能な行動から把握可能だとした。さらに、諸個人の「不可量部分」はそれ自体で存在しているわけではなく、社会慣行と相互影響の関係にある。マリノフスキは、フィールドの人々の内面の“うごき”を見通しながら、社会全体の動態を見晴らす、総観的な見方をもっていた。こうしたフィールドでの姿勢は、フィールドワークという調査方法を採用する“うごきの比較学”が取り組む“うごき”の解明に示唆的である。

ラトゥールの「連関の社会学」は、フィールドの複雑性を「社会的なもの」の外挿で説明せず、社会的なものが新たな組み直しに向けて変化するうごきを追跡する理論と方法を彫琢してきた。安定したまとまりに変化や差異を持ち込み、思いもよらない結末をもたらすような媒介子の翻訳過程を、ANTは注目する。人間とモノの作用連関をひたすら記述する一方で、アクターの合間には把捉できない広大な未知の領域があることを甘受しつつ、「社会的なものの組み直し」を解明することがANTの課題である。社会変化の萌芽を「構造」「システム」「社会的文脈」といった「社会的なもの」で置き換えず、徹頭徹尾、新たなつながりに照準する。そのためには「ひたすら記述すること」と「空白を埋めてはならない」という姿勢が求められる。こうしたラトゥールの議論は、フィールドから諸個人と社会の変動の結節点を解明しようとする“うごきの比較学”に重要な論点を提起しているといえよう。

最後に、今後の課題として2点を挙げておきたい。第1に、“うごき”をどのようなものとして捉えるかについてのさらなる考察である。一方で、可視的局面／潜在的的局面、可量部分／不可量部分という二元論を想定して、それらの循環関係として“うごき”を認識するやり方がある。本稿で取り上げたマリノフスキ、また“うごきの比較学”は、筆者を含めてこうした方向性で研究を進めてきた<sup>67)</sup>。他方で、前景と後景、表層と深層、外部と内部といった二元論を排し、すべてをフラット化して“うごき”を捉えようとするのがANTであり、ラトゥールはこの立場を徹底させようとする。フィールドワークに基づく研究の場合、いずれの立場がより社会

67) アルベルト・メルッチの社会運動・集合行為論の「可視的な動員局面」と「潜在的な運動局面」の議論は、拙稿を参照。鈴木鉄忠、2017年、前掲書、99-101頁。

的世界を理解できるかどうか一つの論点となる。

第2に，“うごきの比較学”は、フィールドのどのような“うごき”を解明しようとするのかという本稿の問いに加えて、この“うごき”を「どのように」解明するかという方法論の課題もある。本稿では紙幅の関係上言及できなかったが、ラトゥールは『社会的なものを組み直す』の第Ⅱ部でこのことを論じている<sup>68)</sup>。社会的なものが変じ始める局面を捉えるためにANTが準備した手立てを、フィールドワークの方法として読み替えていく作業が必要になるだろう。

謝辞：本稿は，“うごきの比較学”研究会における議論，また第3節のANTの議論は，「生成的対話研究会」（JSPS 科研費 17K04268）における竹端寛と高橋真央の議論に多くの示唆を得た。記して感謝したい。

---

68) ラトゥール，2019年，332頁。